

「食と農」の博物館

展示案内 No.63

展示期間■2012.10.12～2013.3.24

東京農業大学「食と農」の博物館

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28

TEL.03-5477-4033

FAX.03-3439-6528

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)

休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

『古農具展』～その技と美～



はじめに

古農具は長い間、人力、畜力によって使われた民具です。これらは名もない農民や職人によって作られたものではありますが、我が国の農業の発展に大きく貢献してきました。

戦後、古農具は農業の機械化により不要のものとなり、農業生産の現場から姿を消していきました。しかし古農具は合理的な機能を持つだけでなく、木や藁などの自然素材でつくられたものは造形美を有し、使った経験のない人たちをも魅了します。

そこで本展では、それら古農具の用法いわゆる“技”と、“造形美”という視点から紹介することを意図いたしました。先人が、創作し改良

を重ねていった古農具について理解し、我が国の農業のもっていた多面性について考える機会となれば幸いです。

今回、本展を企画した本学学術情報課程は、学芸員と司書を養成しており、農学系大学で両資格養成を併有する課程としてユニークな存在であります。この課程の開設にも関係して、本学は長い年月をかけて古農具の収集を進めてきており、現在約4,000点を収蔵しております。それらの古農具は産業考古学会で「日本の産業遺産300選」に指定されており、本学の学生はもとより、広く社会における研究や教育において大いに活かされるものと考えております。

(教職・学術情報課程主任 村 清司)

収集の始まり―田中芳男の精神



田中芳男（1838～1916）

本学は明治24年（1891）、榎本武揚によって創設された徳川育英会育英齋農業科を祖としていますが、農具収集の歴史は明治37年（1904）、本学前身の東京高等農学校が標本室を設置したことに始まります。しかし先の戦災でそのすべてを焼失し、後に全国の校友や父兄関係者の協力で収集を再開します。この取り組みは、戦後としては他機関よりも早く、本学の誇る学術コレクションの一つに挙げられています。

本学の古農具コレクションの歴史で、初代同校長として招聘された大日本農会幹事長の田中芳男について触れなければなりません。なぜなら当時は私立学校として経営が厳しかったことから同農会の附属となり、この時、招聘された田中が創始者である榎本の農業指導者養成の理念に基づき、農具コレクションの標本室設置を考えたからでしょう。



明治37年に始まった標本室。農具と動植物標本が一緒に収蔵されており、写真の中央には羊のはく製も見られます。

これについては田中が歩んだ歴史から窺うことができます。天保9年（1838）、信濃国飯田（現・長野県飯田市）に生まれた田中は、我が国初の理学博士である伊藤圭介に医術本草

学を学び、慶応2年（1866）幕命によりパリ万国博覧会に派遣されます。明治維新を迎えてからは、我が国初の博覧会開催をはじめ博物館や図書館、動植物園の建設を推進した人物としても知られているからです。また伊勢神宮の農業館創設にも関わり、同校に招聘され、標本室設置では大日本農会から多くの資料をも提供されています。これは、田中が校長であったからこそ実現できたといえるでしょう。標本室の設置で、図書館建設の基礎も出来上がり、大正14年（1925）大学に昇格し、標本室は図書館附属となります。この形は大学が世田谷に移転してからも続き、後に附属農業資料室と名を変え、今日の独立した「食と農」の博物館となります。なお、昭和33年に設立された本学醸造博物館は「食と農」の博物館設立時に吸収合併されました。

このように、かつての本学図書館には、他大学では存在しなかったとされる博物館法に基づく特殊資料標本係とする部門が設けられていました。実際、昭和7年には、日本博物館協会に東京農業大学図書館附属標本室の名義で正式に入会しています。つまり、古農具の収集・保存は本学では、図書館運営の重要な方針の一つでもあったのです。これは1978年、本学図書館が全国に先駆けて「古農機具類写真目録第1集」を刊行したことから解ります。その収集について「これの実現を図ることは農学徒たるものの責務であり、且つ亦当大学に課せられた重要な社会的使命の一つであろう。」と同目録には記されています。

本学のそうした標本室と図書館の関係は、明治5年（1872）博物館（東京国立博物館の前身）、そして書籍館（国立国会図書館の前身）を開館させた田中が、両施設は本来、一つの組織として機能するという西欧で学んだ総合博物館としての考えを、本学が継承してきたことにあります。すなわち、農業教育における実学主義の確立では実物情報を持つ標本室と文字情報を有する図書館が一体であるとする田中の精神が根底にあったと言えるでしょう。本学では、それを継承して現在の学芸員と司書を養成する学術情報課程が存在しているのです。

四季を彩った古農具

日本は瑞穂の国と言われる程、稲作中心の農業を育んできました。これを物語る様に当館が収蔵する古農具には稲作に関するものが数多く見られます。

稲はもともと熱帯系の作物で一年を通して栽培できますが、四季によって気温差のある我が国では一部の地域を除いて、年一度の栽培です。そのため各季節による稲作の作業が明確に分かれており、使用される農具も地域によって呼び方や形態も異なります。我が国の稲作は、南北に連なる地理的環境に定着してきた農耕文化だけに、そこで育まれた多様な農具は季節観や地域観を感じさせるものでもありました。

古農具は江戸時代に各地の神社に五穀豊穡を願って奉納した「四季耕作図絵馬」の中に、四季折々の農作業風景と共に描かれています。農業の機械化が更に進展する現代でも、古農具が現役で使われていることもあります。本展ではそれらの中で、昭和30年頃まで稲作で使用されていた主な農具について紹介しています。



20-60 編笠 千葉県八日市場市 1968年収集
直径 33.0cm 高さ 18.0cm 藁草

先ず春は田植えの準備で始まる田起こしでの鍬や犁が登場します。犁はとりわけ牛馬との関わりが欠かせない農具で、その形は古来より殆ど変わっていないとされます。田植えは一年の中で最も賑やかになる農作業です。笠を被り、伝統的な仕事着を纏い、腰には竹製の苗籠を縛り付け、苗を植える“早乙女”と呼ばれる若い女性たちで水田は活気付きます。中には唄を歌いだす早乙女もいました。初夏は手押しの水田除草機や畦畔の草刈り鎌、追肥の携帯用の桶などがあり、稔りが近づく頃、各地の稲田には案山子

も農具の一つとして存在しました。収穫の秋は、多種多用の農具が使われる季節です。稲刈り鎌、稲束を掛ける「ハセ掛け」や「ホンギョ」と呼ばれる自然乾燥用の細長の杭や、岩手県南地方の一部では「吊るす木」と呼ぶ一見、農具とは思えないものまでが現在でも使われています。



ホンギョ 岩手県前沢町(現・奥州市)平成3年10月
写真 鈴木均氏

乾燥を終えた稲束は千歯抜きや足踏脱穀機で脱穀し、唐箕で藁屑と籾を選別し、玄米は正味60kgの供出米として米俵に入れられます。この過程でも色々な農具が使われていました。とりわけ本館には、国内に現存する万石（玄米を篩にかける農具）のうちで最も古いとされる文政元年のものが収蔵されています。そして冬は、稲藁を用い翌年の供出米用の俵を編む俵編み機や、再び迎える春作業に備えて土間で行う藁仕事でも様々な農具がありました。

作業では着る、被る、履くなどのもの、そして稲作儀礼で使われるものも関連する道具として加えると、実に多くの農具類が四季を彩り存在してきたこととなります。鍬の柄の様に使い込された農具には黒みを帯びた光沢があり、不思議と品格をも感じます。また唐箕の様に送風の調整ができる複雑な構造を持つ農具は、造形美を想わせる作りにもなっています。手の込んだ藁草の編笠は現代で言うなら、ファッション的な被りもののようにも思えてきます。

これらは単に農具としてではなく、農民芸術としてのモノと捉えて見ることも出来るのではないのでしょうか。かつてパリ万国博覧会に赴き、また農業館創設に関わった田中芳男も、農具の美しさを感じていたに違いありません。

(黒澤弥悦)



6-133 唐箕 新潟県松之山町 1983年収集
長さ144.6cm 高さ108cm

「伝える技の美」伝統的な鍬の使い方

鍬は弥生時代の水田遺跡から発掘されています。その用途はかつては同一の鍬でも水田、畑、開墾、耕起、代掻き、除草、畝立て、土均し、畦塗り、移植、収穫などに使用されてきました。

日本の各地域の土壌は気候により土性を異にしています。各土性に合わせて湿田、乾田、深田、傾斜地などの農作業効率の向上を目的として様々な形態の農具が各地にありました。それぞれの農具はその地に適応した機能を有しています。まさに作物で云うところの適地適作であり、農具でいうなれば適地適具であります。これは永年の経験則から生まれた道具であり質素で無駄のない研ぎ澄まされた形をしています。それらは茶道具の持つ美と同様なことではないでしょうか？

そこで鍬の形態は主として次のようになります。



1-15 鍬 三重県津市 1971年収集
柄の長さ114.0cm 刃床部の長さ40.0cm

1、木鍬；ブナ、ナラ、ケヤキ、クリなどの枝が柄であり、幹の部分が刃床部（風呂）となり一体化した鍬。

2、風呂鍬；風呂とは、刃床部の一部で台ともいい刃先と柄とを結ぶ部分で木製であり、風呂の先端部分に鋼をはめ込んだ鍬。

3、金鍬；刃床部すべてが鋼で柄は木製。

4、備中鍬（股鍬）；金鍬の刃床部を切り抜いて股状にした鍬の総称。2・3・4・5本備中鍬などがある。

5、踏み鍬（踏み鋤）；風呂鍬と同様に刃床部と柄からなり柄角は140～180度。木鍬と同様に幹と柄が同一な鍬。

次に鍬の持ち方は一般的に右手が利き手です。鍬の柄の持ち方は左手で柄の先端を握り、そこを支点として、利き手の右手を力点とし、利き手は刃床部と左手を支点とする間の柄を握り滑らせます。左利きの人の場合はこの逆となります。作業の進行方向は全面耕起、開墾、畦塗り、収穫などは前進します。畝立て、土寄せなどの作業は後退します。また、傾斜地の耕作は等高線に沿って畝は作られます。水田の作土の深さによって柄の長さ、柄角も変わります。農家はそれぞれの土地に合わせ、農作業効率を高めるために上記1、2、3、4、5、の鍬を所有していました。

現在では各種の鍬に代わり、トラクター、ハンドトラクターに各種のアタッチメントを取り付け農作業を行っています。

今日、私たちは健康を維持する手段として身体を動かす余暇農業を行なっています。その道具



1-19 クロツケグワ 秋田県森吉町 1971年収集
柄の長さ90.0cm 刃床部の長さ43.5cm

具として小回りの利いた過去に手軽に使用されていた鍬が消滅していくことはさびしい限りであります。

（梅室英夫）

古農具からの情報

我が国の農具は、弥生時代に登場したと言われており、先人たちの努力により改良が行われ、鍬や鋤等の耕耘具、播種器、鎌、千歯扱き、唐箕、脱穀機、臼、水車、荷車など様々な用途の農具が生み出されました。また、これらは地域によっても独自の変化をとげ、多くの種類の農具が存在します。

一方、技術の進歩により、動力式の耕耘機やコンバインなどの農業機械が登場すると、従来の農具は次第に使われなくなり、納屋や倉庫などで朽ち果てていきました。「実物」情報は、部品、素材、構造、触感、動作、操作方法など多くの情報が含まれます。しかし、利用されなくなり手入れが行われなくなると、次第に劣化して得られる情報量も減少して行きます。いったん消失してしまった情報を元に戻すには、別のメディアなどに情報が記録されていない限り不可能で、「実物」の復元もできなくなります。

本学では、日本農業の発展過程を明らかにする重要な資料として考え、失われていく古農具や農作業着等を収集し、体系的に整理・保存することを昭和43年より本格的に開始しました。当時、東京農業大学図書館は、「文字情報」を取り扱う図書部門、「実物情報」を取り扱う博物館法に基づく標本部門、「映像情報」を取り扱う視聴覚部門を有しており、図書館・博物館・映像資料館の機能を有する情報を総合的に取り扱う組織でした。この組織のもとで独自の東京農業大学図書館古農機具類分類表を完成させ、全国から収集した古農具を分類・整理し、昭和53年～58年にかけて古農機具類写真目録（第一集・第二集）が作成されました。この目録は、

合計2,460点の古農具とその銘文167枚が収められ、資料の写真・収集場所・収集年月・用途・形状などの情報が記載されています。現在でもこの目録を見た利用者からの問い合わせがあります。

また、収集した古農具は、学術情報課程の学芸員履修学生の教育にも利用され、農業の歴史や資料の保存方法・取り扱い・古農具の構造の理解や実測図・設計図等の作成等に使われました。この成果は、古農機具類作図テキスト 第1集（東京農業大学出版会 梅室英夫・宮本八重子著 1986）として刊行されています。

古農具は、地域ごとに特徴ある進化を遂げており、そこから得られる情報は単に農業の発展過程を示すだけでなく、地域の生活様式を解明する貴重な民俗資料です。古農具の消失は、農業の発達や生活様式を知る手がかりを失うだけでなく、その時代の文化を消失させてしまうこととなります。近年、「食育」教育が活発に行われていますが、先人の知恵や技術情報が詰まっている古農具は、先人達の食糧生産に対する並々ならぬ努力を知ることができる教材としても活用できます。失われていく古農具やその情報を後世に伝えるため、農林水産省では、農機具データベース (<http://agriknowledge.affrc.go.jp/search/image/noukigu>) を作成して公開しており、同時に多くの博物館でも収集・保存に努力しています。「農業」の名を大学名に冠している本学も、同様に収集した古農具を学生教育へ活用しつつ、情報を後世に伝えるように努めなければなりません。

（惟村直公）



東京農業大学図書館古農機具類写真目録
（第一集～第二集）



東京農業大学図書館古農機具類写真目録



古農機具類作図テキスト

東京農業大学図書館標本室古農機具類分類表

1 整地用具	耕起用	銚、犁、鋤、踏銚、鋤簾、杓、耕転機	等
	攪碎用	塊割、馬銚、振馬銚、碎土機、ハロー	等
	鎮圧用	ローラー	等
2 育成用具	施肥用	肥柄杓、肥料散布機、ホーク	等
	成形用	筋引、田植綱、田植定木、ころがし	等
	播種移植用	播種機、移植鍬、蛸足	等
	中耕除草用	鎌、カルチベーター、雁爪、土入機、 水田中耕除草機、草搔	等
3 防除用具		噴霧機、撒粉機、誘蛾燈、爆音機、鳴子、泥掃、猪よけ	等
4 揚排水用具		風車、水車、龍骨車、踏車、振バケツ	等
5 収穫用具	刈取用	鎌、手押型稲麦刈取機	等
	掘取用	山芋掘、苟掘、蓮根掘	等
6 穀物調製用具	脱穀用	扱箒、唐笄、穀打台、千歯、舂打、豆叩、 玉蜀黍脱粒機	等
	脱稈用	籾摺臼、籾摺機	等
	選別用	箕、唐箕、団扇、農用扇風機	等
		万石籠、篩、米選機	等
乾燥用	乾燥機	等	
7 収納用具	貯蔵用	俵、叭、麻袋、紙袋、穀入	等
	包装用	目貫、漏斗、俵締機	等
8 穀物製精用具	精米用	臼、杵、踏臼、精米機	等
	製粉用	石製摺臼、精粉機	等
	精麦用	押麦機	等
9 食物加工用具		臼、杵、木鉢、蒸籠、製麵機、糧切、醸造、 豆腐製造器、澱粉製造器	等
10 藁稈加工用具	調製用	藁選、藁打、横槌、	等
	加工用	縄綯機、筵機、俵編、叭織、棧俵編、畚編、 草鞋編、蔴編	等
11 肥料調製用具		堆肥切、油粕切、豆玉削、ニシン切	等
12 特用作物用具	収穫用	刈取鎌、茶摘銚、	等
	彩織用	剥皮機、蒸桶、綿繰、和紙漉	等
	搾油搾汁用	蔗茎搾、油搾、薄荷蒸溜器	等
	製茶用	焙炉	

13 園芸用具	栽培管理用	切出、剪定鋏、 ^{じよろ} 如露、植木鉢	等
	収穫用	鋏、 ^{かご} 籠	等
	選別用	選果機	等
	加工用	^{かんびょうきり} 干瓢切	等
14 養畜用具	牧草調製用	レーキ、モアー	等
	飼料調製用	押切、チョッパー	等
	飼育管理用	給餌器、給水器、 ^{いくすうき} 孵卵器、 ^{かいばおけ} 育雛器、 ^{きり} 飼葉桶、爪切 毛ブラシ、養蜂器	等
	毛処理用	鋏	等
15 養蚕用具	桑樹用	桑切鎌、 ^{くわつみづめ} 桑摘爪、 ^{くわこきき} 桑拔器、拔根機	等
	飼育管理用	桑切包丁、桑摘籠、 ^{さんぼく} 蚕箔、 ^{さんか} 蚕架、 ^{さいせいき} 催青器、カルトン、火鉢	等
	^{じょうぞくせいけんよう} 上蔴整蔴用	^{まふし} 蔴、 ^け 毛羽取機、 ^{ぼとりき} 蔴固、 ^{ばんけんき} 乾蔴機	等
	整糸用	選蔴機、糸車、鍋	等
	^{はたおりよう} 機織用	機織機、 ^{ざくり} 座繰	等
16 伐採用具		^{なた} 鋸、 ^{くさび} 鉦、斧、楔	等
17 土工用具		^{つるはし} 鶴嘴、 ^{かけや} 掛矢、シャベル	等
18 運搬用具		一輪車、荷車、田舟、 ^{そり} 橇、 ^せ 背負梯子、 ^こ 籠、担架、 ^{もっこ} 畚、 ^{てかぎ} 手鉤	等
19 装具類		^{くら} 鞍、 ^{くつこ} 口籠、 ^{うしぐつ} 牛靴、 ^{たづな} 手綱、 ^{はみ} 鼻輪、馬銜	等
20 作業衣類		^{みの} 笠、 ^{ももひき} 蓑、 ^{はんてん} 股引、 ^{はんてん} 袴纏、 ^{てっこう} 前掛、 ^{きゃはん} 手甲、 ^{わらぐつ} 脚絆、藁靴	等
21 度量衡類		^{ます} 杓、 ^{はかり} 秤、 ^{しゃくづえ} 尺杖、 ^{けんざお} 間竿	等
22 動力		水車、石油発動機、モーター	等
23 製炭用具			
24 その他			

おわりに

当館の農業資料収納室には全国各地の古農具が収蔵されており、その調査で訪れる研究者がいます。今回も企画展の準備中に、神奈川大学名誉教授の河野通明先生が我が国の「在来犁」調査で3日間に亘り訪れました。在来犁は中国や韓国から伝わった頃の古代の形を殆ど変えずに伝えてきた犁のことで、本学が全国各地に残っていたものを無くなる前に収集し、保存してきたものです。犁は一木の部材を利用し機能性を重視して作られていますが、「在来犁には一木の自然の曲線に美しさも感じられる」という先生の説明に、改めて古農具の魅力を感じました。古農具を知らない現代の農学徒にもその魅力と研究の必要性を教授できたらと思います。(黒澤弥悦)



調査の助手を務める博物館実習生

『古農具展』～その技と美～

関連イベント

■ 講演会

「鍬—その技」伝統的な鍬の使い方

講師：前・「食と農」の博物館副館長 梅室英夫

日時：平成24年10月28日(日) 13:30～15:00

会場：「食と農」の博物館2階セミナー室

「連携する博物館と図書館の今昔」

講師：国立国会図書館長（前・東京農業大学教授）大滝則忠

日時：平成25年1月12日(土) 13:30～15:00

会場：「食と農」の博物館2階セミナー室

■ ギャラリートーク

日時：10/13・14、11/3・4、12/1・2、1/12・13、2/2・3、3/23・24
13:30～14:00

講師：館学芸員

展示の主催・企画・制作

【主催】東京農業大学 学術情報課程・食と農の博物館

【企画・制作・展示及び展示案内執筆】

「古農具展」—その技と美—企画展示実行委員会

委員長 村 清司

監 修 梅室英夫

委 員 黒澤弥悦、木村李花子、中野捷三、惟村直公（以上 学術情報課程）、
安田清孝、西嶋 優（「食と農」の博物館）

その他の展示・催事のお知らせ

■ 常設展

「醸造のふしぎ—微生物が醸す世界—」展 【期間】平成24年3月30日(金)～平成26年3月23日(日)

【主催】東京農業大学応用生物科学部醸造科学科、同短期大学部醸造学科

鶏（ニワトリ）剥製標本コレクション

展示中

色々な酒器コレクション

展示中

農大卒業生の蔵元紹介（酒瓶のオブジェ）

展示中

■ 企画展

今知られていること、伝えること「タロイモは語る」

【期間】平成24年10月12日(金)～平成25年3月24日(日)

【主催】(財)進化生物学研究所

「古農具展」—その技と美—

【期間】平成24年10月12日(金)～平成25年3月24日(日)

【主催】東京農業大学学術情報課程、東京農業大学「食と農」の博物館